

## NHK スペシャル 「ヒューマン なぜ人間になれたのか」を観て

3/22/2012

北村社会福祉士事務所

代表 北村弘之

今回は、上記タイトルのドキュメンタリー番組を観た感想等について触れたいと思います。

この番組は、NHK スペシャルとして、この1月22日から4回にわたり放映されたもので、第一回目は「旅はアフリカからはじまった」 第二回目は、「グレートジャーニー」、第三回目は「大地に種をまいたとき」、第四回目は、「そしてお金が生まれた」でした。ともに、人類の歩みを考古学学者等の研究を通して明らかにするというもので、私にとって大変興味をそそる内容でした。

4回シリーズを通して訴えたいのは、「人間とは何か。人間を人間たらしめているものは何か。私たちの誰もが秘めている『人間らしさ』の起源を20万年という人類史の中に探る」というものです。映像を観ていると、よくぞここまで、世界中の多様な研究者を追いかけて、その成果を映像にしたのかと思うとディレクターの執念深い思いがあったのではないかと推察します。

特に、私が興味をもった第一回目と第四回の内容について記してみます。

第一回は、人類の起源とされるアフリカ大陸での興味深い事象が発見されたことです。それは、人間はお互いに協力して生きていたというものです。その現象として取り上げていたのが、出産でした。人間はチンパンジーから700万年前に分化されたといわれており、遺伝子的には人間と1%しか変わらないことです。また構造的には、チンパンジーの骨盤は広く、一人でも子どもを産むことはできるが、人間は骨盤が狭く、何人かの協力をえないと産めないというものです。そういえば人間の出産には助産婦が付きますよね。人間の身体自体がそのような「協力関係」で生きていかなければならないようになっているという興味深いものでした。

また、世界中の国々で次のような実験をおこなったところ、面白いことを発見したというのです。それは、「いっぱいあるお金をどのようにしていいですよ」と問いかけると、どこの国の人でも自分でもらうのは56%で、相手にあげると答えた人は44%もいたということです。先ほどの、お互いに「協力」すると同様「分かちあう」という気持ちがあるということです。

現代と異なり、着の身着のままの生活の中、お互いが助け合って生活することこそが人間になってきた源のようなものを感じました。そしてそれは今も「絆」となって存在するのではないのでしょうか。

第一回目では、こんなことも放映されていました。私にとって、現代の「携帯・ゲームマニア」の存在が大変気になったものでした。それは、戦後の米国で、親のいない幼児は2歳までに1/3が亡くなったというものです。原因は、親がいないことによる「コミュニケーションの欠如」ということを言っていました。大変ショッキングな事例です。人間は顔を合わせたり喋ったりすることで、気持ちがたかぶることもありますが、逆に穏やかになることもあります。目を見て話すことの大事さを改めて知りました。

第四回目は、お金が人間を人間らしくしたというものです。

最初の都市が紀元前 4000 年に西アジアに出現し、そこには分業化された職業が発達し、貨幣が用いられたということです。それまで、人々は生活の中で「平等」であって、猟してきた動物や採取してきた植物もみんなで分け与えながら平等に食べていたわけです。そこには、他人をさしおいてという人がおらず、その日暮らしたったわけです。しかし、「麦」を中心に貨幣が品物の交換手段になり、長期的な生活設計ができることになったのということです。しかし、お金は職業の発達を促しましたが、そこには貧富の差がみえるようになったのです。

これは、集団から孤立でもありますが、集団からの個人の独立でもあると言っていました。

今回の放映を通して、私は次のように考えました。

人間は、人間が防備できない自然環境の変化に対応するばかりでなく、人間自身が作った生活環境の変化に耐えうるようにできていると感じました。しかし、このままの人間の身勝手が果たして将来の生活維持に充分対応できるものかは疑問でした。自然界の中に人間というひとつの動物が共存して生きているのに、あまりにも人間のエゴがまかり通っているのではないのでしょうか。

人間が人間たらしめているものは、お互いの気持ちの通った心であり、助け合いではないのでしょうか。そして、自然界との共存ではないのでしょうか。もっと「大きな心」で生きていきたいものです。

以上